
五人の守護者と姫君

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五人の守護者と姫君

【Nコード】

N1846Y

【作者名】

優姫

【あらすじ】

海沿いの町から少し離れた一軒家で踊り子をしていた母と二人で暮らしている少女の家にある日二人の青年が訪れた。

その二人から突然告げられた言葉…私が伝説の王！？しかも、目の前にいる青年は王を守る守護者で……………。

突然の訪問

何千年もの昔ミーシュ国には神の声を聞く事ができるという巫女がいた。

かつてのミーシュ国王は国の繁栄を願い巫女に神の声を届けてもらった。

そして、神が王に伝えた言葉は伝説となった。その言葉とは。

『1000年に一度神により選ばれた6人の者が産まれ落ちよう。そのうちの5人は「赤」「白」「黒」「黄」「水」の力を体に秘めている。そして6人目はその5人の者が生まれ落ちた後に産まれ5人の者によって守られ、この国に繁栄をもたらす伝説の王となるう』

というものだった。王は決めた。少女が生まれ、国の城に招かれた時、現王はその座を少女に明け渡し補佐として少女の手助けをし。その五人の男児は神に信用された少女を守護する者達ということで生まれると必ずすぐ王宮へ上げられ少女が現れるまで守護者としての力を身につけるさせるための用意をさせなければと…。

赤は『炎』、白は『癒』、黒は『闇』、黄は『雷』、水は『水』の力を持つ。そして、6人目の王たる資格を秘めた者はその5つの力全てを扱えると言い伝えられていた。

「ちょっと。つまみまだ？」

「ご、ごめんね！お母さん遅くなっちゃって…はい。これ」

ミーシュ国の隣の国マインド国の海沿いにある小さな家に少女と母親は一緒に暮らしていた。

「あ、そういえば。今月の稼ぎだしな」

そう言い女性は少女に手を差し出した。

「え、でもお母さん。このお金出したらお酒もご飯も買えなく…」

「

「つべこべ言つてんじゃないよ！そんなんまた働いてくればいいだけじゃないか！ほら！よこしな！」

そう言いながら少女が大切そうに抱えていた銭の入った袋を取り上げた。

「チツ。しけてんな。たったこれだけかよ…」

そう言い女性はタバコを加え直し、煙を吐くと酒を飲んでいた。少女の生活はこれが毎日である。

女性は一日中家にいるが、少女は夜は大抵外に働きにでている。

「ったく。気持ちわりいな。一体誰ににたんだよ。その髪と瞳の色、気持ち悪くて仕方ないね」

その言葉もいつも聞く言葉だった。少女の髪と瞳の色は今まで同じ人を見かけた事がない色をしていた。

きつと私は魔物の子なんだ。でも、何かの手違いでお母さんのお腹に入っちゃっただけなんだ。だから今頃魔物のところにお母さんの子どもがいるんだ

少女はいつしかそんな事を思うようになった。

そんなある日

コンコン

「はい…？」

少女が玄関の戸を開けるとそこには赤い髪と瞳をした年は自分より4つほど上と思える青年が立っていた。

青年は彼女を見るなり突然片膝を床につけ頭を垂れた。

「やっど。やっど見つけました。我らが王」

「え？王？あ、あの…？」

少女が状況が飲み込めずアタフタしていると青年の背後から青年よ

り遙かに年上と思われる声がした。

「クスクス。申し訳ありませんアリア様。やっと会えた主君に喜んでいただけなのです。お許しください」

そう言うとはまだ頭を垂れている青年の横に來ると青年に話しかけた。

「セイ。姫が困っている。やめなさい。まだ彼女は何も理解していないのだからね」

そう言うとは青年は頭を上げ立ち上がると少女の瞳をじっと見つめてきた。

すると、青年の横の男性が胸に片手を当て一礼をしアリアに声をかけてきた。

「私達は隣の国ミーシュからやってまいりました。私の名はサクス・ムルフと申します。どうぞサクスとお呼びください。彼の名はセイ。赤の守護者です」

「守……？」

アリアが不思議そうにそう呟くとサクスと名乗った男性は家の中に視線を向け言った。

「込み入ったお話がありますので……入ってもよろしいでしょうか？」

サクスがそう言うのと、アリアは今までずっと玄関で会話をしていたことに気がきましたアタフタしました。

「す、すみません！ど、どうぞ……」

そう促されるとサクスとセイは家の中へと入って行った。

アリアは忙しそうに居間の方に行き、お酒の空瓶が散らかっている部屋を綺麗にした。そして母親に客が來た事を伝えた。

母親はミーシュ国の人がきたと知ると『もう家にあげちまったのかい！？この役たたず！いいかい！私が着替えを終えて降りてくるまで帰らせるんじゃないよ！』そう言い残し2階の部屋まで走っていた。

母は昔踊り子をしていたので金持ちの男を落とすのが大好きなのだ

った。そしてミーシュ国といえばお金持ちばかりが住んでいると聞く大国である。

「あ、あの。汚いところで申し訳ありません…今、お茶をお入れしますので少々お待ちください」

アリアがそう告げるとサクサスは今度は胸の前まで手を上げアリアに手のひらを見せるとヒラヒラと振って見せた。

「いえいえ。お構いなく」

そう言われても、こんな貧乏な家にどこからどう見ても王室から来たような煌びやかな人が来ているのだ。お持て成しだけでもちゃんとしなければとサクサスの言葉は受け入れずお茶を入れに行った。そして、お茶を持ってきて。サクサスとセイの目の前へとお茶を置くと母親が着替え終わったのか足音無く走ってきてはマリABELを押しのけテーブル近くに来る。

アリアは母親に突き飛ばされ床に倒れそうになり目を強く瞑るがいつまでたっても衝撃は来なかった。不思議に思いそつと目を開けると

「大丈夫か…？」

さきほどのセイという青年がアリアを抱え上げてくれていた。青年の端正整った顔が近くにあると思うとアリアは頬を染めてしまった。

「あ、あの…」

「…？」

真つ赤になりながら抱えられたままバタバタと暴れているアリアをセイは不思議な表情で見つめているとソファで腰かけアリアの母に腕を組まれた状態でサクサスがセイに話かけてきた。

「セイ。アリア様が困っておられる。下ろしてさせあげなさい」
そう言われると、セイはまるで叱られた雛鳥のように渋々アリアを床に立たせた。それを見ていたアリアの母はそれが気に食わないかのように口を出してきた。

「こんな子どもに敬語など使わなくてもよろしいじゃないですか。この娘は男をたぶらかすのが大好きなんですのよ？ああやって真つ赤になつて暴れれば誰でも自分に優しくなつて、甘えさせてくれ

ると思っっているんですから」

「ちがつ…！」

アリアがそう言おうとすると、セイがアリアの前に腕を出し言葉を遮った。

「この方は我ら五人の守護者の頂点に立たれるお方。そして、将来我が国を繁栄にもたらされるお方だ。口を慎め女」

「つつ！なつ…！！」

女がサクサスの腕から離れソファに腰かけたまま怒鳴ろうとすると、今度はサクサスの言葉が遮った。

「はあ…まだちゃんとした説明も終わっていないのにそのような事を言って…」

すると、その言葉にセイが答えた。

「我主を侮辱する者は誰であろうと許さぬ。このような場所に主を置いておけぬ説明は城ですればいいだろう」と

「そもいかないよ。『こんな出来損ないな女』でもそこにいる『我ら』の主の母君なんだ。彼女を城に連れていくのにこの女の許しが必要なのは当然だよ」

サクサスにそう言われるとセイは舌打ちをしてアリアの手を繋ぎひっぱるとサクサスの向かいの席に座らせた。そして、セイ本人はまるで守るかのようにアリアの背後に立っている。

ようやくセイが大人しくなるとサクサスは小さく溜息を付き腕にかまっている女の額に手を当て無理やり腕から引き離れた。そして、口を開いた。

「私達はあなたに用があつてきたものではありませんので、腕に捕まるのはおやめいただきたい」

サクサスからそう言われるなり女は今までのサクサスやセイに見せていた表情が嘘のような表情に変わり言葉使いまで変えサクサスに言った。

「じゃあ何しにきたって言うのさ。悪いが、見てのとおりこのう

ちにや盗めるようなたいそうな物は置いてないよ」

そんな女にまるでそうかわってしまふのをわかっていたかのようにサクサスは話をつづけた。

「私達はアリア様に用があつてここまで参りました」

「…え？」

アリアがついそう言つてしまふとまるで今にも殺されそうな目で女に睨まれたのでアリアは俯いてしまった。そして、アリアの変わりに女が口を開いた。

「冗談言つんじゃないよ。こんなどこにでもいる娘にいったいどんな用…」

女が言葉を言い切る寸前、女の顔の真横を一瞬何かが通つて行き女の頬には何かに切られたかのような切り傷ができ、血が滴つた。そして、女がその事に気付く寸前後ろの壁でダンっ！！という音が鳴つた。

女が恐る恐る振り返つてみると、壁にはナイフのような物が刺さつていた。

「ヒ…ヒイイイイ！わ、私の顔がああ！わ、私の綺麗な顔にき、傷が！！」

女がそう言いながら前に向き直ると、いつ来たのかアリアの後ろにいたはずのセイが女の目の前に立ちはだかつていた。

「先ほどの言葉…聞こえなかったのか。口を慎めと言つたのだ。醜い顔をもつと醜くしただけだ悲鳴なぞあげるな」

「なっ…！！」

女が怒鳴ろうとすると、突然女の横から白い光が表れた。そして、その光何かが女の傷ついた頬に触れると一瞬にして傷が消えてなくなつた。

「セイ。やりすぎです。あなたがいては話が進みません。大人しくしてられないのなら外で待つていなさい」

光が消えるとそこにはサクサスがいた。そして、光が収まるなりサクサスはセイにそう言い放つた。

セイはまたもや舌打ちを一度すると入ってきたときの戸を開け外へ出ていった。

一部始終を見ていたアリアは何を言えいいのかからず言葉を失っていた。傷が癒えた本人の女も傷が癒えた事に驚いているのか固まっていた。

まあ。セイのおかげで話しやすくなりましたかね・・・。

「話を続けさせていただきます。我が国、ミーシュ国の伝説の話をさせていただきます。普通国の王になるのは王家の一族から...とどの国も決まっておりますが、我が国は違うのです。いえ、正確に言うと1000年に一度だけ違うのです」

そこで少しだけわれに帰ったアリアが聞き返した。

「1000年に一度だけ??」

アリアの言葉にサクサスは一つ頷くと続きを話した。

「何千年も前。ミーシュ国ができたばかりの頃、国に一人有名な巫女がいたのです。巫女は神の声を聞く事ができました。かつての王はそんな巫女を信用し、国の繁栄にはどうすれば良いかを聞きました。すると巫女は言ったのです。『1000年に一度神により選ばれた6人の者が産まれ落ちよう。そのうちの5人は「赤」「白」「黒」「黄」「水」の力を体に秘めている。そして6人目はその5人の者が生まれ落ちた後に産まれ5人の者によって守られ、この国に繁栄をもたらす伝説の王となるう』そうおっしゃったのです」

そこでアリアは先ほどセイに言われた言葉を思い出していた。

『我らが王』

それを見てとったサクサスはアリアに言った。

「そう。その6人目が貴方なのですアリア様」

「わ、私は...違います」

アリアが怯えながらもそう告げるとサクサスは負けじとアリアに詰め寄った。

「私達守護者は初めて我らが王の前に立つと神の声が脳裏に響く

と言われておりました。ですが、私はここに来るまでそれを信じてはおりませんでした。ですが、先ほど戸を開けてくださった貴方を見てやっと信じました。脳裏に神の声が響きました。『我：彼女を愛し。我：彼女を守り。我：彼女に付き従え』とね。おそらくセイも戸が開き貴方を見つけた時私と同じく神の声が脳裏に鳴り響き貴方の前に膝まづいたのでしよう」

『私達』

アリアは先程から気になっている言葉があつたのでサクサスに聞いた。

「あの…私達…って…」

そこで思い出したかのようにサクサスは立ち上がり胸に手を当て一礼をした。

「先程は言わなかったでわかりませんでしたね。お許してください。私は白の守護者でございます。癒やしの力を扱います。守護者は各色によって力が違います。セイは赤の守護者なので炎を操ります。守護者の中で最高位の守護者です。5人の守護者はもう城に集まり何年もあなたの誕生をお待ちしておりました。まさかミ―シユ国外でお生まれになるとは思わなかったので探し出すのが遅れて申し訳ありませんでした」

そう言いながらサクサスはアリアに手を差し出してきた。アリアはサクサスの優しい微笑みを見ているとどこか安心しきった気持ちになり差し出された手に自分のそれを重ねそうになる。と、そこで

「黙って話聞いてりやなにさ」

そこでいつわれに帰ったのかアリアの母親が口を挟んできた。

「こいつが神だとか王だとか嘘言っんじゃないよ。こんなどこにでもいるみすばらしい餓鬼が王？笑わせんじゃないよ。あんた知らないだろうから教えるけどね。この娘は泥棒だって簡単にする娘だよ」

確かにそれは本当の事だ。アリアが差し出した手を引っ込め俯くとアリアの真横までやってきたサクサスがアリアの頭に手を当て撫で

ながら言った。

「知っております。アリア様の事は全て調べさせていただきました。」

「じゃ……!!」

「ですが。それはお母様のためにしたまでの事。アリア様にそうするように仕向けたのはあなたではないのですか？」

サクサスにそう言われると女は口籠ってしまった。

それでも、サクサスは話を続けた。

「この事をマインド国王に知らされたくなければ、この話に口を慎むのはおやめいただきたい。」

「つつ!? か、勝手にしな……!!」

女はそう言うつと階段を上がり部屋へ入ってしまった。

アリアが母を追いかけようとするとサクサスに手首を掴まれる。

「貴方には私達と城に来て頂きたいのです。今すぐ王になれるとは言いません。あなたはまだお若い、あなたが王になることができるお年になるまで待つつもりであります。それにあたって城においていただき力の使い方、王になるための勉強をしていただきます。先生などももう決まっております。後は貴方が来てくだされば。」

「わ、私は……」

アリアが何か言いかけると、その言葉を遮るようにサクサスが言った。

「あなたが我が国に来ていただけないとなりますと、我が国の時期国王はいないと言うことになります……」

「……え？」

不思議そうに見つめてくるアリアにサクサスは悲しそうな表情で告げた。

「確かに、本当でしたら時期国王には王の御子息がなるでしょう。ですが、今のミーシュ国の王には御子息ではなく御息女しかおられないのです。姫様は今のアリア様と同じ恩年11歳であります。16歳になれますとそのまま別の国へと嫁がれる予定ですので、

我が国の王はいなくなってしまうのです。そうすると我が国はどうなるのか……」

「そ、そんな……」

アリアが泣きそうな顔で後ずさるとそこにまたサクサスが言葉を添えてきた。

「アリア様。先ほども言いましたが。すぐに王になっていたきたいわけではありません。アリア様ご自身に王としての自覚が備わってからで構いません。城にいる間に無理だと思われたらすぐにでも家にお返ししても構いません。お願いです。私達と一緒に城へ……」

「アリアはサクサスにそこまで言われ断る事はできなくなっていました。」

「わ……わか……りました……」

アリアが渋々そう言うのと、サクサスは今までの表情がまるで嘘かのように笑顔になり言った。

「そうですか！ありがとうございますアリア様！それではこのまま今すぐ城へ……！」

アリアの手を掴んだまま連れて行くこととするサクサスをアリアは止めた。

「え……あの。荷物は？」

そう言うアリアにサクサスはまたもや言い忘れという感じに告げてきた。

「いいえ。何も持って行くものではありません。城の方に既にアリア様のお部屋、お召し物をご用意されております。」

そして、そのまま家の外に出ると家の前には白く所々に金の埋め込まれた美しい馬車が止まっていた。そして、その入口のところでこちらに視線を送りただ立っているだけの青年がいた。先程のセイだった。

アリアとサクサスが家から出てくる所を見つけると、セイはすぐさまアリアの元へ駆け寄り目の前に片膝を付き頭を垂れた。

「先程はお恥ずかしい所をお見せして申し訳ありませんでした。お許し下さい」

アリアは一瞬アタフタしたがすぐさま深呼吸を一度し、セイに声をかけた。

「あ、あの。セ…セイ…さん」

そこでセイが頭だけを上げ、アリアの見上げ言った。

「どうか『セイ』…とお呼びください。我らが王よ」

そう言われアリアは頬を真っ赤に染めながら言った。

「じ…じゃあ。セイも私のことは『アリア』って呼んで？」

アリアからそう言われたセイは一瞬驚いたように目を見開いた後サクサスの方に視線を送るとそれを見ていたアリアもサクサスに視線を送った。

サクサスは笑顔でセイに言葉を告げた。

「アリア様の言葉は絶対です」

そう言われるとアリアは満面の笑顔を作りセイに言った。

「セイ！これからよろしくね！」

セイはそんなアリアの笑顔を優しく見つめ『よろしくお願い致します』と返した。

そして、アリアはセイの手を借り馬車に乗るとすぐに動き出すのかと思ったがまだ動かなかった。セイは自分の横窓際に腰かけているのにサクサスがまだ外にいるのだ。

不思議になってサクサスに視線を送ると、そこにはどこかを恐ろしい眼差しで見つめているサクサスがいた。

アリアはその時、サクサスがどこを睨んでいるのかわからなかったがセイはそのことを知っていた。睨んでいる者も知っていた。

突然の訪問（後書き）

こんにちは！おひさしぶりの方はお久しぶりです！

最近仕事でご無沙汰しておりましたが：少し空きができましたので新しい作品をかき始めてみました。

なので！今のうちに他の連載中の作品も完結させてこの作品だけでなく新作を2〜3個書こうと思います！

応援よろしくです

さてさて、今回のこの作品ですが女の私的な思考？？？で作ってみましたw

簡単に言つと「こんな男の子に愛されたい」「みたいな考えで作りました

1話では赤と白の守護者が出ましたが。皆さんわかりましたか？赤の守護者と白の守護者の性格

一応私的には赤は超鈍感で主命な真面目君で、白が大人で優しい頼れるお兄さんみたいな感じです。まあ、1話だけではわかりませんね。

2話からは話も進む予定です。残りの守護者も出てきますしね。残りの守護者の性格もお楽しみ下さい。

長い旅路

お隣の国と言ってもやはり行くのには幾日かかるものだ。

ガタゴトガタゴトという音を周りに響かせながら馬車はマインド国とミーシュ国の間。まだミーシュ国には入らない道沿いを走っていた。

一緒に乗るのだと思っていた白の守護者サクサスは茶色いたてがみの黄金色の瞳をした馬に乗り馬車の横を歩いていた。

アリアは今までマインド国からミーシュ国側ではない反対方向の海沿いの町に住んでいたので、その町の外に出た事がなく瞳を輝かせながら初めて見る外の世界を堪能していた。

アリアの前ではそんなアリアをどこか優しく、でもどこか真面目な視線で赤の守護者セイが見つめていた。

少ししたところで突然馬車が止まりサクサスが窓の枠に手を置き中にいるアリアとセイに話しかけてきた。

「今日はこの村で休みましょう。時期に暗くなりますので早いに越したことはありません」

そう言われ、アリアは空を仰ぎ見てみるともう夕刻と言ってもいいような夕暮れ色に空が染まっていた。これからこらいつたい真っ暗になるだろう。それまでに宿を取ろうと言うことなのだ。

アリア達は今、マインド国ミーシュ国の境目にある小さな村に来ていた。三人は今日一晩この村で過ごし明日、ミーシュ国に入り城に向かうのだ。

馬車から降りようとするセいに手で制されてしまう。そして一言話しかけてきた。

「アリアはまだ降りませんよう」

そう言うと一緒に馬車を降りると

しばらく辺りをキョロキョロと見回した後馬車の扉を開け外から中

に手を差し伸べてきた。

「アリア。お手を」

そう言われセイの手に自分のそれをのせると乗った時同様今度は手を繋ぎながら馬車を降りた。

「ねえセイ？なんで馬車を降りてから周りを見渡したの？誰か探してたの？」

馬車から降りるとアリアは先ほど何故セイが馬車から降りてすぐ辺をキョロキョロと見渡していたのかを聞いてみた。

「あなたは伝説の我が国の王。あなたが国に来ることで我が国は今まで以上に繁栄することでしょう。ですが、それは他の国にとつてたあつてはならぬこと、刺客を送つて来る者もいるでしょう。

そのための守護者です」

「??」

セイの言っている言葉の意味がわからず顎に手を当て考え込む。

「簡単に言いますと。我が国が美しい国になることを他の国の王は反対しています。我が国が繁栄しない…つまりアリア様が死ねば我が国に繁栄は来ないと言うことです。あなたを殺すために殺し屋を送り込んでくるかもしれませんからね。そして我ら守護者はそんなあなたを立派な王に、そして貴方を消そうとする者から守るために存在するのです」

と、今までどこにいたのかサクサスがわかりやすく説明をしてくれた。

「でも私は…！」

「ええ。貴方はまだ王ではありません。あなた自身が決めて下さつて構いません。それでも、伝説の王として生まれてきたのは貴方だけなのです。いつかきつと貴方は王になりうるでしょう。その可能性をまだ小さい芽のうちに紡ごうとしているのです」

何かを叫ぶように言おうとしたアリアの言葉をサクサスが理解したかのように続けて言った。

サクサスの言葉に恐ろしさを感じたアリアは薄く涙を流してしまっ

た。

「大丈夫だアリア。我ら守護者がいつもついて守っている命にかえても」

そう言いながらセイはアリアの額に口づけをした。突然のことで一瞬何をされたのかわからなかったアリアは数秒固まった後、顔を真っ赤にさせ後ずさった。

「え…！？え！？」

アリアが頬を真っ赤に染めながらセイを見つめているとコホンとわざとらしい咳を一回したサクサスにアリアとセイが視線を移した。

「申し訳ございません。アリア様。突然のことで驚かれたでしょう。我が国ミーシュでは額に口づけをすることは相手に忠誠を送ると言う意味があるのです」

そんなサクサスの言葉を聞くなりアリアはまだ薄く赤く染まったままの頬を両手で隠し俯いた。

それでもなんだか恥ずかしい…あんな事されたこともない…

と、ここでもたしてもサクサスが話を区切った。

「さて、少し暗くなつて参りましたし。そろそろ寒くもなるでしょう。宿に入りましょう。風邪を引かれては大変です」

「宿？」

どうやらサクサスは馬を降りてすぐ姿を消していたと思ったら村の宿屋に話を通し金を払っていたようだ。

アリア、セイ、サクサスはその後宿の方にまっすぐ向かい1階で暖かいスープ、パン、チーズを食した。

そしてその後休む部屋へと行くのだが…。

部屋に入ると、アリアは部屋の中を見渡し、ある事に気付いた。部屋の中にはベッドが一つしかなかったのだ。当然だ、アリアは女性、あと二人は男性なのだから隣の部屋で眠るはずだ。

「皆さんは隣のお部屋に…？」

それでもアリアは気になり二人に問いかけてみた。

「我々には部屋はありません。私は部屋の外周りを、セイは部屋の前で警護をいたします」

「警護って、さっき言ってた人達から…？」

「ああ」

次にアリアの問いに答えたのはセイだった。

セイの返事後、先に口を開いたのはサクススだった。

「それではアリア様、明日お迎えに上がります。お休みなさいませ」

先ほど、宿の外で自分が他国の王に狙われている事を知ったアリアはそれ以上何も言うことができず、ただサクススの言葉に返事を返すことしか今はできなかった…。

カチコチツ、カチコチツ…。

「ん…」

布団の中で寝返りをうち扉の方を見つめるアリア。

眠れない…

扉の向こうにはセイがいるはず、どうしようか迷いながらもアリアは布団から這い出て扉の方に向かった。

カチャ。

扉をゆっくり開けると扉の横、アリアが覗いた目の前に壁に背をあずけてセイが床に座りこんでいた。

「あの…セイ…？」

おどおどと話かけると、それに気付いたセイがゆっくりとアリアの方に向いてくれた。そして優しく微笑み、アリアに話しかけてきてくれた。

「アリア、どうかなさいましたか？」

そんなセイにアリアは微笑み返し、彼の横に座った。

静かな廊下でただ二人、隣どおし沈黙が続いたが、それを最初に破ったのはアリアだった。

「ねえ。セイは私を最初見た時から「我主」って言ってたけど。」

セイは構わないの？私みたいななんの取り柄もないそこらへんにいるようなダメダメな娘が王になるとか言われて、拳句自分の主だなんて言われて」

そんなアリアの問いにセイは前を見据えたまま静かに答えてくれた。「アリア。あなたはご存知ではないかもしれませんが、全ての国には必ず一人、我ミーシュ国より派遣された王に信頼されし者が暮らしているのです。そして、その者は自分の子孫に王より賜った使命を受け継いでゆくのです。その使命とは『必ずや、伝説の王、それを守るべし五人の守護者を見つけ出しわが国へ連れて来い』というものだそうです」

ゆっくり、そして淡々と語られるセイの話のアリアもまた、前を見据えたまま静かに聞き入っていた。

「私やサクサス殿を見ればおわかりになるかもしれませんが、守護者となるべき者はその力と同じ色の髪、瞳をしているのです。それは、この世界にはその色の者はたった一人しか存在しないという証でした。ですが、私が産まれたのは国と言われるほど大きくなく村と呼んだほうが正確な場所だったのです。私はそこで髪や瞳の色が悪魔の落し子だと言われ恐れられ、誰一人として相手にはしてくれませんでした。いつしか私は『自分は本当に悪魔の落し子なのだろうか？私の力は人を殺すためだけのものなのだろうか？私を必要としてくれる人はいないのだろうか？』と思っていました」

セイのその言葉を聞き、以前アリアが海沿いの家で同じ事を考えた事があることを思い出していた。

「そんなアリアに気付く事なくセイは話を続けていった。

「そんなある日でした。森で同じ村の子どもたちからいじめを受け涙を堪えながらも悔しがっていた私のところに一人の旅人が現れたのです。その旅人は言いました。『お前のその髪、瞳はもしかや伝説の守護者か？もしそうならば私と共に来なさい、お前の主となるべき者がいつか現れる時まで、私がお前を鍛えてやるう』と、私はその言葉が嬉しかった。自分の力は人を傷つけるだけで守ことはで

きない呪われた力なのだと思っていたからこそ、彼のあの言葉はとも嬉しかったのです。そしてその時決めました。もし、もし私の守るべき主が現れたのなら全力でお守りしようと、この命我主に明け渡す覚悟で私は主の忠実なしもべになろう、と」

最後のセイの言葉でアリアは何かに気付いたかのように勢いよくセイの方に向き直ると、セイもまたアリアの方を向いて微笑んでいた。だが、その瞳はとても悲しそうな瞳をしていた。そして、そのままアリアの手を握るように言った。

「私は、10年間あなた様が現れてくださるのを心待ちにしておりました。我…主…」

そう言うときセイはアリアの手を上に掲げ、口づけをした。

アリアは頬を真っ赤に染め上げながらも必死にセイに伝える言葉を探した。

「そ、そんな事言わないください…命を私に明け渡すだなんて…命はセイのものでしょうか!?人にあげちゃだめ!せっかく持つて産まれたたった一つの命を人にあげないで!私は!…わ…わたし!…は!。セイと!セイと友達になりたいの!」

セイにそう叫びながら胸の前で手を掲げながらそう訴えると、そんなアリアにセイは驚いたかのように目を見開いていた。

自分が突然叫んでしまった事に恥ずかしさを感じたアリアはそのまま『お、おやすみなさい!』と、それだけを伝えて部屋へ入ってしまった。

静かになった廊下に沈黙が落ちた。

翌朝。

コンコン

「アリア様、お目覚めでしょうか」

ゆっくりと戸を開けるとそこには昨日別れた時と何も変わりのないサクサスがいた。

「おはようございます、アリア」

サクサスの後ろからゆっくりと静かにセイが挨拶をしてきた。

「おはようございます。二人とも」

そう言いながら二人を部屋の中へと促すと、二人はアリアに一礼して中へと入ってきた。

そのままサクサスは台所へ行き、セイは大きなテーブルの傍まで行き到着するとその窓から外を眺め出した。

アリアは台所へ向かうサクサスを呼び止めた。

「あの、私がお茶入れますから…」

そう言いながら台所へ入ろうとするアリアの胸に片手を当て動きを止めると。

「貴方にそのような事させられませんので、お気になさらず。私におまかせ下さい。美味しいお茶をいれさせていただきます」

そう言いながら微笑むサクサスを見ているとアリアは何も言えなくなり踵を返しテーブルに向かった。そして傍にある椅子に腰かけた。しばらくすると台所からお盆にカップを三つ載せてサクサスがやってきた。そして、持ってきたカップをテーブルに並べるとポケットに手を入れ地図を出し机に広げた。

「今日はここから北東に行きここにある森を通って行きます。城に到着するのは今日の夕刻の予定です」

サクサスの指す方を目で追っていると確かに大きな森があった。

「もう少しここから進むとミーシユ国の管轄外になります。我々に何かあったら助けが来るでしょう」

「何か…？」

アリアがそう疑問の声をあげるとサクサスは一つ頷いてから説明を始めた。

「ええ。今日、通ろうとしている森は『魔の山』と呼ばれており異形の者がはびこっていると噂されている森です。一度入った者は二度と戻って来ない…と言われております」

そう言われてしまうと怖くなりアリアが一步後ろに下がると後ろから誰かに抱きしめられた。

アリアを後ろから抱きしめていたのはセイだった。

「安心して下さい。アリアは私がお守りいたします」
そう言うときセイはアリアを上から眺め微笑んだのだった。

一階で朝食を終えた三人はそのまま部屋へは戻らず昨日乗った城の馬車の迎えを待った。

馬車が来ると降りる時同様セイの手を借り馬車に乗り込み後でセイが馬車に乗り込むと扉がしまった。

やはり昨日同様サクサスは馬車の後ろで馬に乗っている。

「森に入る寸前、カーテンを締めます」

突然外を見つめていたセイがそう告げてきた。

「？どうして？」

外を眺めたままのセイにそう問うとそのままアリアの方を見向きもせずアリアの問いに答えた。

「魔の者には色々な者がいるからです。空を飛んで攻撃をするもの、我々守護者が使うような魔法を使って攻撃をする者もいると聞きます。この馬車にはサクサスによって結界が貼られております。カーテンを締めていなければその窓から魔の者は入ってくるでしょう。そのためにカーテンを締めるのです」

セイにそこまで説明されると魔の者がどのような姿をしているのかわからないアリアは恐ろしさに体が震えだしてしまった。アリアは自分を自分で抱きしめるようにして俯いていると突然窓の方から声がした。

「アリア様。大丈夫ですか？」

声の主はサクサスだった。サクサスは心配そうにアリアを見つめると突然片手で拳を作り窓から馬車の中へと伸ばしてきた。

拳をアリアの前で止め、上に手の平が上を向くようにしてから手を開くと中から白く小さい手に乗るほどの大きさの女の子が出てきた。女の子はサクサスの手を離れフワフワとしばらく飛ぶと、アリアの存在に気づき嬉しそうに近づいてきた。

「わあ…！サクサス様この子は…？」

サクサスは馬車の横で馬をかりながら馬車内を見つめていた。

「その子は癒しと守りの精霊カルバです。我々守護者はそれぞれの瞳にあつた魔法を使うことができる」と説明しましたね。」

「そう問われるとアリアはうなづいてみせた。」

「それは我々が精霊と神に愛され選ばれて生まれてきたからなのです。精霊は属性によって姿も異なります。例えば…セイ。」

名を呼ばれると、アリアはセイの方に向きなおった。セイはサクサスに名を呼ばれると仕方なさそうにサクサスの時と同様拳を作り胸の前まで拳を持ってくるとまるで気を集中させるかのように目を閉じると少ししてから拳から赤い炎が立ち上り始めた。そして、そのまま拳を開くとそこには赤く燃え上がった小さい猫がいた。猫はアリアを見つけると膝に飛び乗りゴロゴロと普通の猫と変わらぬ声を出している。

「このように炎は猫の姿をした精霊なのです。そして、精霊は力なき人間には懐きません。」

サクサスの話した言葉に疑問を持ちアリアはサクサスに聞いてみた。

「力なき人間？」

「ええ。力なき人間。それは私と貴方以外の人間の事です。お迎えに上がった日ご説明したはずですが。私達守護者は五名います。」

そして、我々の中心に立つ貴方はその五つの魔法全てを滑る力を持つていると言われております。だから、今その二匹の精霊も貴方に懐いているのでしょうか。」

「そ、そんな…私にそんなものありません…間違いです…」

「現に二人が懐いているので貴方には力がありますよ。」

そう微笑みながら言うサクサスにアリアはこれ以上何も言えなかった。

そのようにしてしばらく三人で会話しながら進んでいると馬車が突然止まった。

「？」

アリアが不思議に思い窓から外を見ようとするとサクサスが窓の淵に手を起き馬車の前を真剣な瞳で見つめていた。アリアも恐る恐る覗いてみると、そこには森の入口があった。朝聞いた『魔の山』だろう。外から見るだけでも黒く淀んでいて恐ろしいオーラを醸し出していた。

「アリア様ご安心をカーテンさえ締めていてくだされば貴方にはなんの被害もないことでしょう。少しの間申し訳ありませんが、中でセイと話でもしててください」

そう言いながら馬を走らせよとするサクサスにアリアは先程から気になっていた事を聞いてみた。

「あの、サクサス様？サクサス様は中に入らなくてよろしいのですか？」

アリアがそう聞くとサクサスはアリアの頭に手を起き微笑みながら答えてくれた。

「私は癒しと守りを司る術者。馬車に近づく者が入れば排除するのも私の勤め馬車には御者もおりますので、御者を守るのも私の勤めです。御者がいなくなってしまうと馬車を運転できる者がいなくなってしまうからです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846y/>

五人の守護者と姫君

2011年11月30日22時01分発行